琉球大学学術リポジトリ

琉球と日本本土の遷移地域としてのトカラ列島の歴史的位置づけをめぐる総合的研究

メタデータ	言語:
	出版者: 高良倉吉
	公開日: 2009-03-03
	キーワード (Ja): トカラ列島, 琉球, 十島村, 中之島, 奄美
	キーワード (En): Tokara Islands, Ryukyuan, Toshima village, Nakanosima island, Amami Islands
	作成者: 高良, 倉吉, 山里, 純一, 池田 栄史, 赤嶺, 政信, 狩俣, 繁久, 真栄平, 房明, 豊見山, 和行, 鈴木, 寛之, Takara, Kurayoshi, Yamazato, Junichi, Ikeda, Yoshifumi, Akamine, Masanobu, Karimata, Shigehisa, Maehira, Fusaaki, Tomiyama, Kazuyuki, Suzuki, Hiroyuki
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/9008

中之島西区における墓制調査の概要

鈴　木　寛　之

1、調査地について

中之島はトカラ列島最大の面積・人口をもち、十島村役場の支所や平成5（1993）年に開館した十島村歴史民俗資料館が置かれている、トカラ列島の中心的役割を果たす島である。島の中北部には現在も噴煙をあげる海抜979mの活火山、御岳がそびえる。

中之島には西・東・日之出の3区がある。西区は島の南西側に位置している。平家の落人伝説が伝わる、島で最も古いと言われる集落であり、海岸に近い里地区と段丘に位置する楠木地区から成る。東区は明治28（1895）年以降に奄美大島の笠利町赤木名からの移住者によって開拓が始まった集落であり、船倉・寄木の2地区がある。日之出区は島の中央部の台地に位置する、昭和期になって島外からの入植の人々が拓いた集落である。

1995年に刊行された『十島村誌』での「中之島の聖地と神々は、在来の西区の人々によって管理されている。」〔下野1995：910〕という表現が示すとおり、島の古くからの民俗文化は西区が主体となって伝承されるものが大半である。しかし現在、これらの民俗文化は人口減による担い手の喪失によって急激な変容を迫られている。国勢調査での数値によれば、昭和35(1960)年には237世帯・1,024名だった島の人口が、40年後の平成12(2000)年には105世帯・183名にまで減少している。島には高校がなく、中学校を卒業した者は島外に出ることになり、島では過疎化・高齢化が進んでいる一面がある。今回の調査では主に西区の事例を中心に、中之島の民俗文化の変容を示す好個の事例として島の墓制を取りあげ、事例の収集と分析を行った。

2、西区の墓制　ー楠木地区を中心にー

西区では里、楠木それぞれの地区にテラ（墓地）がある。楠木地区の共同墓地内では、祀り手がいなくなってしまった墓石が横倒しにされ、苔むした状態で敷地の至るところに転がっている光景が見られる。一度倒した墓石は汚れても掃除をしてはいけないといわれ、可哀想に思って情けをかけると「後を引く」のでそのまま放置しておくのである。鹿児島をはじめとする「内地」に引き揚げて行った家の墓石がこのように横倒しになっているのだと言われる。

西区では毎月4回、旧暦の1日、13日、15日、28日に墓参りが行われる（他に、故人の命日にも墓参を行う）。このうちの13日はかつて御岳が噴火した日だと言われている。供花する花は、鹿児島に注文して購入したり、自家で植えているものを用いるのだが、これだけ供花の機会があると「都会と違って1年中花が絶えることはない」という。

現在、楠木の墓地で供花が行われている墓は6つある。数年前までは9つあったものが

短期間で3つも減ってしまったとのことである。墓石の建立年代をみると、昭和2（1927）年、昭和27（1952）年、昭和34（1959）年、昭和50（1975）年、昭和58（1983）年にそれぞれ建てられた5基と、すでに墓石が撤去され、かつて墓石が載っていた台座だけが残されているものが1つの、合わせて6つである。今回の調査では、現在の墓参の様子を実見し、人々がどのような思いで墓参りを続けているのか聞き取りを行った。

3、盆踊りの変化

かつて西区では、旧暦7月14～15日には区民総出で盆踊りが行われていた。盆前から熱心に稽古を行い、行事に備えていた。花踊り・俵踊り・相撲踊りなど踊りの種類も多く、狂言なども行われ、村の無形民俗文化財にも指定されていた行事であった。

平成6（1994）年8月の踊りの様子は、「10年ほど前から、人口の減少などの理由で狂言も行われなくなり、全体的に簡素化されつつある。現在でも行われているのは、14日・15日とも出端・鉦太鼓の大踊り・垣まわり・小踊り・大踊り」〔大胡編 1996：129〕だと報告されているが、それから約10年が経過した現在では、盆には太鼓を叩くだけで、全く踊らなくなってしまっている。盆踊りの途絶に関してある話者は「何事も人手がなくて･･･。人がいないと駄目」だと語った。平成13（2001）年に、十島村歴史民俗資料館館長・折田瑞穂氏はこの盆踊りについて語るなか、島に伝わる「無形民俗文化財が、本当の『無形』になってしまった･･･」と嘆息されていた。

4、課題

ここでは西区の墓制と盆踊りを事例として近年の変化について述べたが、伝承の担い手の喪失による西区の民俗変化の現状について、他に年中行事の変化や地主神社の祭祀をも事例に加え、別稿で詳述したいと考えている。

【引用文献】

大胡修編　1996　『＜社会調査法ゼミナール卒業論文集1＞　中之島調査報告書1』
明治大学政治経済学部大胡修研究室
下野敏見　1995　「民俗文化」　十島村誌編纂委員会編『十島村誌』　十島村役場
十島村役場　2001　『2001年　鹿児島県十島村村勢要覧』　十島村役場

【付記】

ここでの記述内容は、平成14（2002）年から平成16（2004）年にかけて行った中之島の墓制調査での聞き取りに基づくものである。この調査には筆者のほか曳田和彦（琉球大学大学院人文社会科学研究科）、安慶名朝子（琉球大学法文学部人間科学科）、中村友美（同左）の3名が参加した。中之島における墓制・民俗変容についての具体的な調査報告は別稿としてまとめることとしたい。

（すずき　ひろゆき　熊本大学文学部助教授）